

アーティストインタビュー

茅根利安さん（ココロノキンセンアワー）

—幼少期から今に至るまでのお話を伺えますか

茅根：僕の家は、洋服の仕立て屋だったんですよ。だから、意外とおしゃれなものを見る感覚ってきつとあったと思うんですよ。それで、僕、小学校ポマードつけて、ヘアセットして行ってたそうですよ（笑）。そんな、変な洒落っ気を持った子どもだったんですね。

で、当時の長町っていうと、やっぱり仙台の中では田舎のほうで、周り農家の方々とかだったので、そん中でちょっと違う位置にいたような気がしますね。

—演劇を始めたのはいつだったんですか？

茅根：高校2年生。それまでは僕は、1人でやるのが好きで。プラモデルに熱中。もうプラモデルプラモデルプラモデル。そのあとは図工が結構得意で、図工はずっと5だったんですね。なんで、絵書いたり工作したりっていうのは好きで。そういうことやってて、父親が写真が趣味だったので、カメラにも興味持ち始めて。

高校に入って写真部に入ったら、高校演劇を撮ってくれみたいなこと言われて撮りに行ったら、それ観て、演劇自体にはまったんじゃなくて、高校演劇のコンクールで審査発表待つ間に、いろんな高校がみんな余興やるんですよ。それ観たらすごく楽しそうで。なんかみんなで仲良くやるのっていいなって思って。男の子と女の子が同じステージで歌歌ったりダンスやったり変なコントやったりするのが、すごい輝いて見えたんですよ。これは楽しそうな世界だなって思って。翌日だと思うんですけど、ぼく東北高校なんですけれども、演劇部に入りに行きましたね。

—じゃあ、最初から、例えば役者がやりたいとか演出をやってみたくとかそういうスタートではなく。

茅根：全然。僕は、なんか、人と一緒にやるっていうことがすごく魅力的に見える

ただけなので。だから、今でも1人芝居は全くやる気ないですよ。こんな孤独な作業誰がやるかって思って。なんかやっぱり相手役がいることによって、いろんなことがその場で起きる、あの感じがもう大好きで。

—集団作業である以外に、演劇のどういったところに面白さを感じたんでしょうか。

茅根：それはやっぱり、圧倒的なターニングポイントになったと思うんですけども、1個年下の常盤木学園にいた丹野久美子に出会ったことですね。で、その時に井伏銀太郎がまた仙台高校に行っていて。で、高校卒業する時に、いわゆる丹野久美子さんと銀ちゃんと3人で劇団作ろうってなったんですね。つまり、演劇部から劇団を動かすっていう時に、また違う面白みを覚えましたね。だから僕ね、俳優やるのももちろん好きなんですけど、なんか、制作向いてるかもしれないみたいな。

—で、高校卒業に合わせて劇団を立ち上げて。それから？

茅根：大学卒業したら洪洋社に入ったんですよ。石川裕人さん、絵永けいさんのね。テント演劇全盛の頃ですからね。だから、黒テント、あれが大きく僕を変えましたよね。これは、高校の先輩が、「黒テント来るから絶対観に行けよ」って言って観に行って、丹野久美子さん、井伏銀太郎とかと一緒にみんなで西公園に観に行って、それで『キネマと怪人』っていう作品を観て、「すげー」ってなって、もうどハマリですよ。で、アンダーグラウンド系がたまらなく好きになっていて、やっぱり同じようにそっちにやっていた石川裕人さんの洪洋社に僕は夢中になって。でも洪洋社は7、8ヶ月かな、1年いなくうちに潰れたんですよ。解散しようってなっちゃって。えって。俺1回も舞台立てなかったみたいな。で、潰れちゃったのでどうすっかなって。よし、これは劇研麦に1回行こうって思ったんですよ。劇団麦にのちになりましたけど、当時は劇研麦でした。で、その時に、面白いことに金野むつ江さんがいた。で、丹野久美子もいたんですよ。2作品やった時に辞めさせてもらって、そこでようやくI.Q150結成なんですよ。広瀬通りのね、フォーラスの横の2階にあった喫茶店で、銀ちゃんと丹野久美子さんと7月1日に話して劇団作ろうってなったんですね。それが1979年。その

頃にまだやっぱり高校演劇出身の連中がまだまだ仙台にいて。で、その人たちにいろいろ声かけたら、あっという間に30人集まったんですよ。で、いやいけるなこれみたいな。で、白鳥ビルを押さえて借りて、12月に公演をやったのがI.Q150のスタートでしたね。

—一番衝撃を受けたっていうのがテント芝居とお聞きしましたが、立ち上げ当初にどんな作風、方向性にしようという話し合いはありましたか？

茅根：方向性とかっていう話はしなかったです。なぜならば、すでにその時に丹野久美子はやっぱり高校演劇で劇作してて、それがとてもいい芝居だったんです。コンクールでも東北大会に行くぐらいのいい作品をもうすでに作ってた、書けたので、もう丹野さんの作品でやりましょう。みんなで作ろうっていう話だったので。もうなんも、その時にはどういう形でいくかなんて決まっちゃったよね。

—I.Q.150としては何年間活動されたんですか？

茅根：僕は、結局27年間一緒にやりましたね。

—27年間の中でも特に思い出に残っていること、印象的なことはなんですか？

茅根：劇団結成した当時はもう無我夢中で。で、僕らが思う丹野久美子オリジナルをやりましたね。『ノアの洪水がくるまえに』『One Night Dream』『Milky』、3作品ぐらいいったんですよ。で、そこを作った時に、ここで大きな出会い。東京の迦樓羅舎っていう小さな数人の集団なんですけど、千賀ゆう子さんっていう女優さんと、丹下一さんっていう俳優、笠井賢一さんっていう演出家が組んだ、小さなプロデュースの『桜の森の満開の下』、坂口安吾の、それを舞台化したものがあるので、それを仙台にて上演したいんだっていうふうなことで、僕らの公演も観に来てくれたんですよ。で、そこから交流が始まって、それでいろんな東京こととか教わって、教わったっていうか。こういう手の出し方あるんだ演劇にっていうのが、刺激をだいぶ受けて。

時を同じくして、平田オリザさんが仙台に来たんですよ。彼が全国の、いろんな

劇団を見て歩いてた時期があったんですよ。その時にI.Qを観てくれてね。で、こまばアゴラ劇場に呼んでもらったんですね。で、そこで、東京初めて公演やりましたね。なんか前評判も良かったみたいで。超満員の中で『眠れる夜の羊は少年』っていうのやったんですよ。そしたら、全然東京の芝居なんか知らないで、僕らは、知らないっていうのは言い過ぎかもしれないけど、作ってきたから、東京の人には全く新たな演劇が登場したみたいに見えたんですよ。だから仙台の純粹培養って、「白菜か！」みたいな。そういうふうに言ってほめてもらいましたね。

そこからどんどん、うちでもうちでもって行って、下北沢演劇祭とかパルテノン多摩小劇場コンクール、コンテストとか出してもらい。パルテノン多摩では、またそこで優勝しちゃって100万円もらったんですよ。賞金いっぱいもらったね。あとは、今はなき渋谷ジャン・ジャンでの公演とかね。それからタイニイアリス、今はないんですけど、新宿で1回引っ越してるんです、その両方もやっぱり、タイニイアリス行ってますしね。いろんなどころに。それから東北ツアーもやりました。それは十月劇場と一緒に。寒河江に行こう、盛岡に行こうって行って、新潟行こう、福島行こうっていろいろ。まずは東北を回っていましたね。あと一番遠かったのは名古屋か。名古屋で呼んでもらって名古屋で公演してきましたね。

—その頃は劇団員の皆さんは、お仕事は演劇1本？

茅根：いやいや、何を考えていますか。みんな仕事をしてる。学生多いったのがまず強かったですね。当時の合言葉、「演劇作る上で一番安いのは人件費だ」。だってもう、I.Qに参加するだけで楽しかったんだもの。で、30人ぐらいのやっぱり大所帯のままやっぱりツアーしてましたからね。それはそれは楽しいですよ。みんなで。で、丹野久美子さんがやっぱりお母さんで。あの人、料理うまくてね。本当に仲良しな集団で、みんなで炊き出ししながら、寝袋持って劇場に泊めてもらって旅してました。「ホテル？　なんですか、それ」。みたいな。パルテノン多摩小劇場コンクールの時に、予算出してもらって初めて旅館に泊まって、「ああ、風呂がある。これが旅館か」って感動してましたね。でも僕なんかは、劇場に寝るのが大好きで、俺、劇場にいるのがすごい幸せなんです。だから、みんなで作って、その舞台に寝袋で寝るのがなんとも気持ちいいの。で、劇場って真っ暗じゃないですか。壁も真っ黒だしさ。これたまんないですよ。そんな

ことをやっていっぱい旅をしました。楽しい旅でしたね。

—皆さんお仕事を休まれて？

茅根：うん、その時だけ。だから仕事あるやつは、もうギリギリリハーサルに間に合うように来てねって。

—それで、続けていって、もうプロとしてやっていこうとか、仕事をやめてこっちに集中しようみたいな考え方は出たりはしなかったんですか？

茅根：ない。なぜだろう。お金もらったら、収入あったら、その金を元手でもう1本作ろうって。それこそが、公演やるのが僕らにとってごほうびだと思ってましたね。だから個人的にお金を分配したっていうことはない。

—逆に会費とかもなかった？

茅根：劇団費はありました。あったんですけど、それが収入が多かったときは団費、今月なしみたいに、「お、やったー」みたいなことでつなげてましたね。

—I.Qでの活動を終えるのに、どんなきっかけがありましたか？

茅根：それは、ずっとやってきて、自分自身が煮詰まった。っていうのはどういうことかって言うと、もうその頃で40代じゃないですか。やることと言えば、やっぱり若い子入ってきたらそれを育てなければならぬ。俺もって、俳優としても伸ばしたいなっていうすごい欲求がその時に高まった。いわゆる、年齢的に体力落ちてくるとか、そういう時代だったので。自分自身もうちょっと演劇きちっとしないともったいないなっていう感じあったし。それで、「やっぱり1回ちょっとほかの人たちとやってみたいです」って言って、劇団作っておきながら、「ごめんね」って言ってお別れしたんですね。

I.Q150って、ほかで公演しちゃだめだったの。出ちゃだめだったの。門外不出の俳優だったの。I.Qは、I.Q観るとI.Qでしか会えない役者たちがいてさみたいな。そういう感覚で演劇やってたんですよ。その時に僕は、表に出たらやれっ

かなって思ったわけ。で、一緒にずーっと同じ時代を生きてきた次郎ちゃんとかギユウとかね、そういう人たちいて、あの人たちとやってみたいなっていう思いが強かった、その時には。どうしてもほかの人たちといろんなことをやりたくなくて、I.Q 出たんですね。

—そのあとの演劇活動は？

茅根：まずはあれですよ。自由にいるので、ギユウとぐっと接近したのかな。ギユウがやってる、10-BOX でやってた『エレクトラ』とか『オイディプス王』とか、そのへんのリーディング系の舞台とかに出してもらっているうちに、作るかみたいな話になったわけですよ。『ハイ・ライフ』を10-BOX でやったのをきっかけに、樋渡宏嗣さんがちょうど仙台に来てた頃で。ちょうどその3人が「やる？」っていうふうに。うまく時機が合ったんですね、きっとね。それで作ろうって言って、SENDAI 座っていう劇場を作りたいねっていうことでスタートしたんですね。

もともとヒューマンアカデミーで授業とかを持っていたので、その卒業した子達を呼んで、SENDAI 座の養成所で育てて。で、SENDAI 座自体の公演も、大信ペリカンくんの作品とかをやったりってやったので、結構充実してたし、その時にいろんな、やっぱり野々下くんであるとか上島奈津子さんとか伊藤拓くんとか、そういった今まで一緒にやったことのない俳優たちと同じ舞台を踏むことができたので、それはそれで充実してましたね。

—そこからは、現在に至るまでに

茅根：やっぱり東日本大震災が大きなきっかけとなって、塩釜で遊ホールっていうのがあって、そこはいきなり津波が、1階部分は、5階建てのビルの1階部分はかぶっちゃって、劇場としては一応機能すると。ただ、一般のお客さんには貸せない。これ貸してって言って。で、面白いことやるからって、今しんどいから、なんか楽しいことやりましょうって言って、今度は音楽とかオペラの人とか、舞踊の人とか演劇の人とか、そういう人たちに声をかけて、ココロノキンセンアワーっていうイベントをやったんです。5月から9月にかけてやったのかな。そこで結びついた連中と、12月にエル・パークで、今度はココロノキンセンア

ワー演劇部っていう名前で、演劇公演をしたんですね。だから、最初はココロノキンセンアワーっていうのはイベントの名前だったんだけど、徐々に演劇部っていうふうになって、それも取れてココロノキンセンアワーっていうふうな活動、っていうか劇団みたいな形になりました。

—今はどのようなお仕事をされていますか

茅根：僕は、まずヒューマンアカデミーの講師、非常勤ですけど、ここ15年ぐらいさせていただいているっていうのがあって。それからコマースのナレーターで収益あげて。それからよく音楽関係の舞台で司会とかする。それから朗読して音楽とコラボするみたいな、そうした舞台には意外と出させていただいて、そんなことで、舞台に関わる仕事で収入は100%得てるんですね。だから僕は幸せですよ、ある意味。

それがずーっと続いているんです。僕の生活の中で。何がそれが良かったかっていうと、たぶん最初に東北共立に入ったっていうこと。それによってこの業界の人たちと人間関係がすごくできた。スタッフ関係の人たち。なんやかんや言いながら表現という世界の中で生き続けられてきましたね。それやってんのってギョウと僕ぐらいじゃないかな。ギョウとほか誰いるかなっていうぐらい。僕らの世代だとね。

—辞めていった仲間もたくさんいると思うんですね。でも、茅根さんが、ずっと演劇を手放さずに今もいるっていう最大の理由はなんですか？

茅根：演劇楽しいからでしょ、それは。一番なんか、演劇やってると満たされるね。で、素直でいられるし。相手に対してもその素直を要求できるじゃない。嘘付いてまあまああって、社交辞令が全く通用しない世界じゃないですか、舞台って。その関係がとっても気持ちいいよね。だんだん盛り上がって行って、みんなの気持ちが1つになって、公演ばんっと終わると、次の日からまたそれぞれの世界に戻っていくみたいな。あのいさぎのよさも、いさぎよさもたまらないよね。もう、中毒ですよ。

—ありがとうございました。